

# 知財AI導入提案資料の作成結果

## 出力ファイル

[Microsoft Wordファイルをダウンロード](#)

## 調査の主要結論

作成した提案資料では、オムロンを「全社生成AI推進とR&D基盤を母体に、知財機能を研究開発・技術戦略へ統合する内製型」、島津製作所を「知財部の暗黙知を生成AIで形式知化し、発明届出・翻訳・中間処理・FTO・契約レビューまでを業務モジュール化し、SaaSとして外販する実装型」と位置づけて比較しました。オムロンはAIZAQとRD Buddyを軸に知財AIエージェントを実装し、オムロン/J-STAGE論文やAWS事例では、特許調査分析、IPランドスケープ、発明届出、知財戦略、教育・認定制度までを含む変革が確認できます。島津製作所は、2023年からの開発と社内運用を経て、2025年度に年間8,000万円の外部コスト削減、発明届出工数50%削減、他社特許スクリーニング手作業90%削減を公表しており、定量効果の明確さが際立ちます。

1

## 比較の要点

提案資料では、両社の差を「どちらが先進的か」ではなく、「何を最適化しているか」の違いとして整理しています。オムロンは、役員研修、AIガバナンス委員会、AIZAQ Canvas、知財センタの教育・認定制度、AWS上の閉域性・暗号化・監査ログ設計まで含め、知財AIを企業能力として定着させる設計です。他方、島津製作所は、OpenAI APIとGoogle Gemini API、国内AWS保存、学習・二次利用禁止契約、ユーザー主導削除、運営者アクセス不可設計などを明示し、導入企業が評価しやすいSaaSとして整理しています。そのため、短期ROIや少人数部門の即効性を重視する企業には島津型、R&D・経営・知財の統合を狙う企業にはオムロン型、現実解としてはSaaS先行後に戦略領域を内製するハイブリッド型が有力、という結論にしました。

2

## 文書に含めた内容

Wordファイルには、依頼どおり冒頭のエグゼクティブサマリー、両社の詳細分析、編集可能な比較表、短期・中期・長期の実行計画、推奨体制、想定予算レンジ、ROIの考え方、主要リスクと緩和策、ガント風ロードマップ、Mermaid形式の関係図とガント記述、参考リンク一覧を収録しました。公開情報で確認できない項目は「未確認」と明記し、代替参照としてMETIのAI事業者ガイドライン、IPAの生成AI導入・運用ガイドライン、日本弁理士会ガイドライン、特許庁のAIアクション・プランも併記しています。

3

---

1 <https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/717.html>  
<https://www.omron.com/jp/ja/edge-link/news/717.html>

2 <https://aws.amazon.com/jp/builders-flash/202511/omron-intellectual-property-ai-agent/>  
<https://aws.amazon.com/jp/builders-flash/202511/omron-intellectual-property-ai-agent/>

3 [https://www.meti.go.jp/shingikai/mono\\_info\\_service/ai\\_shakai\\_jisso/20260331\\_report.html](https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/20260331_report.html)  
[https://www.meti.go.jp/shingikai/mono\\_info\\_service/ai\\_shakai\\_jisso/20260331\\_report.html](https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/ai_shakai_jisso/20260331_report.html)